
コミュニティを探して

(5)

藤 信子

山崎亮という「コミュニティデザイナー」の「まちの幸福論」を読んだ。コミュニティを探し回っている私としては、この肩書きと本のタイトルを見るとやはり読んでみたくなる。注文していた本が届いてページを開くと、なんとなく読みづらいような違和感を持った。ページが薄いグレイの方眼紙のデザインになっているので、普通は白かアイボリーのページの色に慣れている身としては、活字とのコントラストの差が小さく読みづらく感じるようだ。読み進めいくうちに慣れてくるので、

まあそういうデザインです、ということなのだろうけれど、手に取ってもういいや、と思う人がいるかもしれない。装丁をした人の意図は何なのだろう。この感じは目の悪い私だから思うのかもしれない、読者はもっと若い世代を想定しているからかもしれない、と読後ちょっと考えた。

著者が「日本でただひとりコミュニティデザイナー」と紹介されたことがある、と書いているように、この仕事を知らないのは私だけではないようだ。「地域の課題を、地域の人

たちが解決するための場を作るデザイナー」と言われても、すぐにはわかりにくい。それは私の中にあるデザイナーという言葉に対するイメージが、服、車などの物を作るというところにあるのかもしれない。「場を作る」ということばが、この本を読み進んでいくうちに少し理解できるような気がしてくる。この本の著者は正確には、山崎亮+NHK「東北発☆未来塾」政策班（+から後ろは活字が小さい）となっている。それは「第3章 10年後の被災地の未来を考える ドキュメント東北発☆未来塾」が、NHK 番組制作班が2012年1月に始まった山崎亮が講師を務め、東日本大震災を経験した17名の大学生行った、10年後の東北を考える1ヶ月半にわたるワークショップのまとめを担当しているからだろう。この章で、コミュニティデザイナーとしての「場を作るデザイナー」の一端を、具体的にイメージしやすくなるように、この章を置いたのだろう。

このワークショップの始まりのアイスブレイクの手法やブレインストーミングなどは、研修会やプロジェクト型の授業のアクション志向で考えていくやり方と似ている。「エネルギー」「農業」「コミュニティ」と3チームに分かれた学生たちは、東北の10年後をこんなふうにしたいと考え、アイデアを練り上げるため現地調査を行い、提案をまとめ上げていく。エネルギーチームの公園はグローブジャングルの回転を電気に変換することなどで、

発電の仕組みを遊びながら学ぶ「発電公園」などを提案している。コミュニティチームからは、シャッター商店街の活性化と若者と高齢者の交流の場としてのシェアハウス商店街等の提案。農業チームは「小学校×農」というテーマで、小学校の場に「農」を取り入れるという提案。校舎などのハードの面から、授業で例えば算数では育てる野菜の成長を計りグラフ化するなどして、数値や数量を「農」という経験から導くという提案などがされている。このような提案が、これからの東北の未来に実を結ぶことを祈りたい。

ところで、この3章はワークショップのイメージとしてはよくわかる例であるけれど、「地域の人たちが解決するための」場を作るということでは、もどかしい例だと思う。ここに集まった17名の学生たちは、多分とても熱心に問題について考えている学生なのだろうと思う。ところが、コミュニティの課題と言っても、皆で共有できる場を持つことは簡単にはできにくいだろう。第5章に、世代の異なる人は、多くの場合両者の意識がかなり隔たりがあるので、つながりをつける難しさがあると述べている。話し合いを呼び掛けると、高齢者は抵抗なく会場に来てくれるが、アイデアを実行に移すとなると、難しく若者の実行力が必要になる。しかし、ワークショップを呼び掛けてもなかなか関心を示さない。何度もお願いしてワークショップに来てもらうことも多いという。それでもワークショ

ップに参加した若者は興味を持ち始めるようだ。「まちの未来を考えていくことは、自分自身の生活に直結した問題でもある」からだという記述に接して、やっとコミュニティデザイナーが、普通の研修会などのワークショップと違うところが見えてきたような気がする。東北未来塾のワークショップの始まりの手法やブレインストーミングが似ていると思ったけれど、一般的に私たちが経験している研修会などで参加者の緊張を解きほぐすやり方は、人工的な場を作って体験することなので、私にとってはなんとなく嘘っぽいというか、恥ずかしいことも多く、私自身研修会の講師をする場合は、ほとんど行わない。その目的のために来たのだからすぐ入りましょう、と思っている。でも著者は、コミュニティの問題を、その人たちと考えなければならない。時間のある人だけとか世代の偏りなどは避けなければならないだろう。そのためには嫌々来てもらうことも日常茶飯事だという。そのためのいかにその場に引き付けるかの技法が大事になってくるのであり、この著者の人と出会うことが好きなことが発揮されているのだろうと思った。考え方として、どんな未来に生きてみたいのか、ゴールを設定し実現するために今できることを考える「バックキャストリングの思考法」も面白い、前例主義の発想の人たちにも参考にしてほしいとふと思った。

文献

山崎 亮 +NHK[東北☆未来塾]制作班(2012)まちの幸福論 コミュニティデザインから考える
NHK 出版